

Tさんのこと

—調査季報100号によせて—

金沢区 関口昌幸

百号記念の調査季報の総目次に、Tさんの名前を発見して思わず嬉しくなりました。きっとその名前を見つけても、彼のことを思い起こす人は、もう数少ないだろうけれども、それでもあの頃のTさんの思いは、当時の調査季報のなかにそのまま変わらずに残されている。

Tさんはかつて横浜の「西部の街」と呼ばれた寿の街に、生活館が開設された時の最初の職員である。二十代であったTさんは、自らドヤに住み込み、労働者と一緒に生活するなかで、夜間銀行や子供会、保健医療の会など、街のなかに人々の集える場を地道に創りだしていった。その彼が、もう二十年以上も前に刊行された調査季報のなかで、猛烈に憤っている。

「労働者からサイフを奪い、気力と技能を奪い、ついには肉体まで奪い去るもの、自己の人生と地域社会、全体社会への愛着と責任感を奪い去るもの、大量の重みを持つはずの人間の尊厳を冒瀆するもの—寿ドヤを生み、寿の労働者の肉体と魂を奪ってゆく日雇労働の非人間性を、いま、私達は告発したい。」

寿の街の社会的矛盾に対して、彼の怒りが鮮烈なのは、それが身を削るような彼の実践に裏打ちされているからだ。

四半世紀という時間のなかでは、その時々々の市政の華やかなメインストリームが、その時代のだれもが正しいと疑わなかった街づくりの潮流が、どれほど不確かで移ろいやすいものか、百冊の調査季報は、図らずも明らかにしてしまっている。

例えば、戦後すぐ、巨大な遊戯場や小型飛行場を持った国際観光基地として、外貨獲得のため

めに構想された根岸平湯湾埋め立て計画が、急速な高度経済成長のなかで、コンビナートの立ち並ぶ重化学工業地帯として変ぼうしてしまつたように。さらには、七十年代初頭、「公害」の元凶として行政や住民運動によって、やっかいもの扱いされたその同じ場所が、今、マリノ・リゾートの拠点として脚光を浴びているように。

しかし、同時に、この百冊の季刊誌にきざみ込まれた、一人一人の市民や職員の、各々の現場に対するそれぞれの思いや実践は、それが彼らの生きた証である限り、時代の底にあって、変わらずに輝やいていく。

△あとがき▽

近年、市民の心の健康への関心は急速に高まっている。それは、児童期、中年期、老年期などライフステージのあらゆる段階で心の健康を損なう人々が増え、この問題が身近な事として実感されてきたからであろう。

この背景には、急速な変化と上げ、複雑化し、高度に管理化した都市社会が、様々な形で市民

「寿にはいまひとつの素晴らしい夢がある。そこには底辺からの人間回復、底辺からの民主主義、底辺からの住民自治を実現しうる素晴らしい期待と、その現実的な可能性がある。」

その後、Tさんは、事情があって、職員を辞めてしまうことになるのだけれども、寿の街には様々な形でかわり続け、五十年を過ぎた現在、大学の医学部で地域医療を学んでいる。

若かりし頃、語った夢をあきらめてしまつてはいないのだ。調査季報のきざみ続けた横浜の二十五年は、そういう二十五年でもあったのだと思う。

の心の健康を脅かしているからだ、と考えられる。

一方、心の病いへの対応も大きな転換期を迎えている。昭和六十三年に精神保健法が施行され、「入院中心の治療体制から地域におけるケア体制へ」と大きく流れを変えており、関係諸機関はそれに向けた取組を模索しているところである。また、心の健康づくりなど、予防的な

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一二〇二九）

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。

面へのアプローチの必要性も強調されている。この特集では、都市生活者の心の健康問題の現状を明らかにし、都市社会の問題として位置付けるとともに、その予防あるいはケアの社会的手だてはどのようなあったら良いのかを考えてみた。

現実には心の病いを治療しケアしている方々にお話を伺っていく中で、心の病いや障害という問題が相変わらず厚い壁にふさがれていることがわかってきた。しかし、患者や家族と医療の枠の中で閉ざされてきたこの問題も徐々に、確実に社会に開かれようとしているのも否定できない。地味だが着実なその動きを読みとって頂けたら、と思う。

△中川▽